

武蔵野日曜集会 復活節祈禱会
武蔵野幕屋の復活

1996年4月7日
小池辰雄

「復活の力」 永遠の現在 「主なるキリストは」 毎回新しい 永遠の青年 未完成人生楽 隠
れ家

●「復活の力」

私はこれから「復活の力」という詩を皆さんにお聞かせしたいと思います。これはもちろん、聖書に基づいて書きました。

「復活の力」(A54 作詞1987年4月12日 歌調 讚美歌384「我こそ十字架の」)

- 1 エノクはメトセラ 生みしのちに
三百年間 神と共に歩む
- 2 エノクはみ神に 伴われられたり
死を見ずこの世に 居らずなれり
- 3 エリヤは死にたる 子に三つたび
おのが身合わせて よみがえらす
- 4 エリヤはバアルの 預言者らと
神の火求めて 祈り勝てり
- 5 エリヤは火の人 ヨルダンにて
火車火の馬 現れたり
- 6 エリヤは炎の 風に乗りに
み空の彼方に 飛び去りたり
- 7 エリヤの分身 神の人よ
エリヤは死にたる 子を憐れむ
- 8 身を子に合わせる 七度びにて
子は甦よみがえりぬ あなうれしや
- 9 エリヤは死にたり 神の人よ
エリヤのむくろ 白き骨よ
- 10 エリヤの墓場に 他人のひとかばね屍
投げ入れられたり 誰か知らん
- 11 エリヤの白骨しらほ その屍に



- 28 岩なるみ墓の
- 27 聖徒の死屍
み声に应えて
- 26 雄叫び給えば
主イエスはゴルゴタで
- 25 言下にラザロは
何たる蘇生ぞ
- 24 死の後三日も
「ラザロよ出て来よ！」
- 23 マルタとマリヤの
イエスも泣きけり
- 22 「若者起きよ！」と
若者直ちに
- 21 イエスは憐み
み手をば板に
- 20 ナインの寡婦の
その死出の途に
- 19 「乙女よ起きよ！」の
甦えりたるぞ
- 18 されどもイエスは
憐み叫べり
- 17 ヤイロの娘は
人々泣きおる
- 16 イエスは途にて
病みたる女を
- 15 ヤイロの娘が
ヤイロはイエスに
- 14 枯骨に預言す
骨肉生じて
- 13 エホバに呼ばれて
霊にて枯骨の
- 12 噫！ 神の人は
生命の霊骨
- 触るるや屍を
甦えらす！
- 死にて死なず
霊すしきかな！
- エゼキエルは
谷を見たり
- 見よ枯骨に
よみがえりぬ
- 今はの際
按手を求む
- 十二年も
癒し給う
- すでに死せり
希望絶えて
- 娘を見て
「タリタ・クミ」と
- 此のみ声に
あなうれしや
- 独子死す
イエス出遭つ
- 「泣くな母よ」
按ぎ給えり
- 主は叫べり
甦えりぬ
- ラザロ死せり
情け深く
- 経にしラザロ
主は叫べり
- 出で来たれり
主の御力！
- 十字架にて
幕は裂けぬ
- 霊震あり
甦えりぬ
- 主の軀は

- 三日目の晨にあした
 主イエスの聖言みことば
 復活よみがえりなるぞ」
 「我は生命いのち
 ハレルヤ・アーメン
 死を乗り越えん
 みめぐみ尽きず

●永遠の現在

我々自身が祈りの世界で復活していかなければね。こういうキリストとの交わりは、いわゆる信じ仰ぐ「信仰」ではない。「信仰」という言葉は、私はまだるっこくて余り好きではない。神・キリストとの交わりの「神交」です。キリストの中に自分を投げ入れる。そうすると、凄い力が来ますから。これは本当です。だから、私は行き詰まりを知らん。昔は無教会で、

「信仰がどうだこうだ」
 なんてやっていた。

「そんな信仰なんか私はありません、神交ならあります」

と、そういう乱暴なことを私は言わざるを得ない。それだから、楽ではない、ありがたくてしょうがない、力が来てしょうがない。そういうしょうがない人間です。パウロさんも私の告白を聞けば、驚き喜んでくれるでしょうね。

讃美歌273Bの「わが魂を愛するイエスよ」の歌詞に、

1 わがたましいを 愛するイエスよ

波はさかまき 風ふきあれて

沈むばかりの この身を守り

天のみなとに みちびきたまえ

とある。この「たましい」は「たましひ」と書かなくてはだめです。漢字では「魂之靈」と書く。「靈」は「ひ」と読みますから、「い」では意味をなさない。音で書くのではなく、内容の意味あいから書かないとね。受霊のことを「うけひ」という。

2 われには外の 隠れ家あらず

頼るかたなき このたましいを

委ねまつれば みいつくしみの

つばさの蔭に 守らせたまえ

3 わが身は全く けがれに染めど

君はまことと めぐみに満ちて

われの内外を ことごと潔め

つかれし霊を 慰めたまわん



「慰めたまわん」
ではない。

「慰めたもう」

です。「たまわん」なんていう書きかたをするとだめなんだ。力がこない。「慰めてくださるだろう」ではない。私はこういうのはみな直して読んでしまう。それでないと力が来ない。私はうわのそらで読まないからね。あなた方もそうでしょうが。

4 きみは生命の
みなもとなれば
正にそうですね。

たえず湧きいで
こころに溢れ

「こころに溢れ」ではない。「からだに溢れ」だ。

我をうるおし

渇きをとどめ

とこしえまでも

やすきを賜え^{たま}

これも

「やすきを賜え」

ではなく、

「やすきを賜う」

です。本当の神交の世界はみな現在の断定です。永遠の現在です。そういう烈々たる魂になつてくださいよ。

●「主なるキリストは」

それから、これはイザヤ書49～55章の内容に即して書いた私の讃美歌です。

「主なるキリストは」(A33 作詩1982年11月5日 歌調 讃美歌359「夕陽は隠れて」)

1 主なるキリストは
救主なれど
選びの民の
彼らは受けず

ユダヤ人はキリストを受けない。

さはあれキリスト
世の終末まで

彼らの帰るを
祈り待ち給う

2 「ああイスラエルよ
選びの民よ！

母親情れなく
その乳児を^{ちのみこ}

忘るるあるとも
我は忘れじ

母親は乳児を忘れることはないんだけれども、そういうことがもしあっても、自分はお前たちを忘れないぞと。

永遠の愛に^{とこしえ}
抱かれざるや

3 主は侮^{あなぢ}られて
人に棄てられ



- 苦患なやみを知り給う
 しかるに我らは
 苦しめられたる
 4 苦しみを忍しのび
ほふりば 屠場ほふりばに向かう
 我らの罪をば
 十字架の上にて
 5 復活よみがえりの主は
みたま 聖霊みたまの器に
ことごとくに 異邦人への
 世界にあまねく
 6 「わが義は来たれり
 この義を受くれば
 贖われし者
 汝れらが胸には
 その次は私自身わたしのことを書いている
 7 み母の胎たいより
みこしほ み神みこしほに護られ
みこしほ 聖言みこしほ聖霊みこしほは
 イエス・キリストの
 それから、幕屋のこと
 8 「わが愛の幕屋
 エホバの僕よ
あかし 身証あかしの伝道
 幕屋を拡めて
エホバ 実存主エホバをたずねよ
 9 近くに居給う
 とやかく思わで
 み腕を拡げて
 10 日の本ひもとの人よ
 神のドラマたる
 キリストの力
 思わず叫よばん
 11 「渴ける人々
 悲哀かなしみの人！
 神に打たれて
 人と思えり
 口を開かず
こひつし 羔こひつしの如
にな 荷にないて独り
 砕かれ給う
 パウロを選ひるがび
ひるが 翻ひるがえらしめ
ひかり 栄光ひかりとなして
 道を伝えり
 我は救ぞ
 救われであり
うた 讃歌うたを謳えよ
よろこ 歓よろこび絶えじ
 無者たる僕
 大胆なれよ
 時期ときは迫れり
 地道ちだうになして
 綱なわを延のばせよ
 1 日の暮れぬ間まに
 主を求めよや
 イエスに帰れ！
いだ 抱いだき給うぞ
みふみ 聖書みふみに来たれ
うつつ 現実うつつの中に！
 われらに迫り
 ハレルヤ・アーメン
 来たりて飲めよ

永遠とこしえの水を

我は聖霊せいれいの

歎なげひ尽つきせぬ

12 わがエクレシヤよ

我れに立ち帰り

いずこも聖国みくにの

いずれの人をも

われは与たまへん

バプテスマせん

生命いのちに溢あふれん

使徒しとらの如ごとく

一如いちごととなりて

現実うつつとなして

迎え抱いだけよ!

日本の讚美歌は気がぬけてしまつて、あまり歌う気がしない。だから、自分で作らざるを得ないんです。

● 毎回新しい

いつか、私は或る教会に招かれて、そこで自分の讚美歌を歌つて聞かせたら、驚いていたね。驚いて、前の方にいる連中が私の言葉を聞いていて、しびれてしまつた。5〜6人がしびれてしまつた。しびれるだけ受けとるのは結構です。あなた方は慣れてるから、しびれないけれども(笑)。あまり馴れっ子になつたらだめだよ。初心ういしんということは大事なんだ。私は毎回新しいんです、同じことを言つても。

「先生はまた同じことを言つてら」

なんて、だめだよ。同じことを言つたつて、それは響こたきが違ちがうんだからね。

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠とこしえに変わらな

という。私もキリストによつて変わらな。表現はいろいろ変わつても、本質は変わらなというわけです。なにしろ、福音の世界は、こんな楽しい世界はないですよ。牧師さんたちは楽しくしてやつて居るのかね、どうなんだかね。参考書を読んで研究して、ものを言つたつて、そんなのは反つてマイナスになつてしまふ。

● 永遠の青年

こうやつて聖書を中心にキリストの聖霊の力で集会することが、語る私も聞くあなた方も、これが一番楽しいのではないですか。あなた方は楽しいんじゃない? 楽しくない?

「まだ時間がこないか」

なんて待つて居るのか(笑)、冗談じゃない。徹夜しても大丈夫だ(笑)。

本当に読書して居て、やりきれないと、眠りなんか忘れてしまふよな。自分で言つてはおかしいけれども、90歳を過ぎて私みたいな、青年みたいなのはちよつといないらしいね。私は永遠の青年だから。眠くはなるけれども、いわゆる疲れをしらない。「ああ疲れた」なんて思うことはないんだ。今だつて道を歩いて居て、面倒臭めんどくさくなると、走つたりするよ(笑)。家内に怒られるんだけどね、



「走ったらいけません」

と。まだ走れるんだからね。90歳をこえて余り走る人はいないらしいな。これは正直、聖霊のエネルギーなんです。魂の中で、胸の中で「主さま！」と叫んでいれば、力がきてしまうからね。本当だよ。

まあ、この調子では100歳は突破するね。アブラハムは175歳まで生きた。モーセは120歳だ。私はモーセに負けないつもりだから(笑)。

「先生はあんなことを言ったけれども、100歳そこで往っちゃった」

なんて(笑)。いかないよ、なかなか。あなた方を愛するがゆえに往かない。そういうことだ。まあ、半分冗談で、半分本当です。年齢なんか数えないよ。年齢なんか数えたらだめだ、

「いくつになったか、あといくつだろう」

なんて。限りなき人、限界を知らない人なんだ。

● 未完成人生楽

シューベルトの曲に「未成交響楽」というのがある。私も未完成人生楽だ。

「これでおしまい、これで完結」

というのはだめなんだ。完結したら、その先はなくなってしまう。未完成が一番いい。本ものは未完成なんだ。ダンテもゲーテも完成した詩を書いちゃったけれども、あれは本当はよくない。ミケランジェロは、彫刻の最後の筆は棄ててしまったという。人間の本当の姿は未完成なんだ。シューベルトの曲はなかなかいいね、非常に靈的なロマンチストだから。兄貴はロンドンに行くはずだったのを、北京にまわされて、北京で仆れてしまった。見舞いに行った母が兄の遺骨を抱えて次兄と一緒に帰ってきた。悲痛と過労のために母は帰りの船の中で失明してしまっただけです。失明した母が遺骨を抱えて帰ってきたのを東京駅で迎えて、私はあの時の気持はなんとも言えなかったね。

人生は涙がおおいね。あなた方もいろいろ涙をお持ちでしょうけれども。その涙を本当にぬぐってくださるのはキリストです。キリストの慰めは他のものとは比較できません。

● 隠れ家

とにかく、キリストは我々の隠れ家です。何でも困ったら、キリストのところへ投身していく。そしてキリストと一つになる。そうしたら必ず力がきます。必ず運命に勝ちます。信ずるの信じないのではない。だから、私は「信ずる」という言葉は嫌いだ。投身するんだ。キリストを信じて何になるかというんだ。キリストに投身して一つにされる。

「我がキリストか、キリストが我が」

という世界に入る。キリストはそうなんだ。イエスは

「私を見た者は神さまを見たのだ」



と言った。そのキリストは

「何もできない」

と言った。だから、「ゼロ＝無限大」(0＝∞)なんだ。無、即、無、限、無、量、と、い、う。これが本当の福音の世界です。キリストは

「自分は何ものでもない」

と言いながら、「私を見た者は父を見た者である」と言った。西田哲学ではないけれども、あの絶対矛盾の自己同一ということですよ。

楽しいね、福音の世界は。あなた方は楽しくないかね。

「もう何時になるか」

なんて考えたらだめだよ。時間を超越して、徹夜しようとおもうなら徹夜できるんだからね。これから徹夜祈禱会をやるのかな。私はしゃべっていると、終りになるほど力がでてくる。力が上からくるから。

ところが、普通の信仰だと——私の無教会時代もそうだった——先生方は、

「日曜日に話すと、月曜日はもぬけのからになって疲れてしまう」

という。そんなのは聖霊がないからだよ。無教会なんて、みんなえらそうな先生方がいたけれども、だめだね。ひとつも本当の聖霊の世界ではない。ただ

「十字架、十字架」

と言っている。私の直接の藤井武先生が天界で

「いやどうも、小池君、それは本当だな。素晴らしいところに来たな」

と喜んでいるでしょう。先生が喜ばなかったらしようがないんだ。いろいろ勝手なことを言いましたけれども、本当に事実だから仕方がない。

讚美歌の歌詞のまがぬけているのを、みな変えて私は読んでいるんだ。でない、と、歌って、力がこないんだ。だから、私は自分の讚美歌を作ってしまった。

讚美歌は、時々勉強の合間にくちずさむと楽しいものですよ。それも霊的な讚美歌でなければだめだよな。自分で言ったらおかしいけれども、あなた方も私の讚美歌を時々自分でくちずさんでみてください。

